2008 年度研究プロジェクト「高度科学技術に伴う広域･学際的諸課題」
作業グループ「創発研究の新しい展開」
Study Group:　New approach for emergence

実施期間：　2008 年度
Term of the Project：　2008 fiscal year

研究代表者：　安冨　　歩　東京大学東洋文化研究所准教授
Group Leader:　YASUTOMI Ayumu, Associate Professor, The Institute for Oriental Studies, The University of Tokyo

研究目的：

ポラニーの主張によれば、創発とは、下位の原理に従う世界のなから、上位の原理に従う世界が自律的に生まれる過程であるが、その過程そのものは、手がかりとなるものは明示されえず、それゆえ手がかりを統合する過程も明示しえず、更には、生み出された新しいものが、何を意味するのかも明らかではない。その代表的過程が「暗黙に知ること」であるが、ポラニーはこのような明晰化をめざす研究の対象となりえない暗黙の次元が、明晰化をめざす科学を支えているのであり、暗黙の次元を否定することは、科学を否定することになる、と指摘した。本研究会では、創発が暗黙の次元に属することを前提とした上で、どのようなアプローチが可能か、そのようなアプローチで、具体的にどのような研究を展開しうるのか、についての展望を開くことを目的とする。

Objectives：

Michel Polanyi indicated the importance of the tacit dimension for all knowledge including the scientific knowledge. The process of knowing in the tacit dimension, namely the “tacit knowing”, is inevitable for every knowledge to exist. Tacit knowing is an example of “emergence”, which means a tacit process where the property which follows the higher principles comes to exist from the that which follows the lower principles. Planyi believed that the rejection of the tacit dimension in the name of “objective knowledge” results in the destruction of all scientific knowledge because all knowledge depend on the tacit knowing. The aim of our study group is to find a new approach to make scientific research on “emergence”.

キーワード：創発、暗黙の次元、暗黙知、状況科学、学習、フィードバック、自我
Key　Word：　Emergence, Tacit Dimension, Tacit Knowing. Situation Science, Learning, Feedback, Self.

研究計画･方法：

主催者の安冨はすでに、「創発を阻害するもの」について研究する、というアプローチを提案している。創発は暗黙の次元に属するが、それを阻害するものは明示的次元に属すると考えられるので、これについては分析的アプローチを適用できるはずである。その一例として安冨は本條晴一郎と協力して、人間同士のコミュニケーションに生じる「ハラスメント」という概念について研究を既に展開している。同様の研究は、社会組織のマネジメント、戦争、テロ、差別、経済活動、環境破壊、生態系、共生、生物進化、といった広範囲の問題について可能と考えられる。多分野の研究者を招聘して、そ

のための方策を論じる。

研究会開催予定：
2008 年 6 月
2008 年 9 月
2009 年 3 月

参加研究者リスト：　28 名（◎研究代表者）

氏　　名	職　　名　　等
◎安冨　　歩	東京大学東洋文化研究所准教授
飯島　　博	特定非営利活動法人アサザ基金代表理事
石井　淳蔵	流通科学大学長
佐藤　　哲	長野大学環境ツーリズム学部教授
千葉　　泉	大阪大学大学院人間科学研究科教授
等々力　政彦	東京大学東洋文化研究所非常勤講師
富田　啓一	大阪大学大学院経済学研究科大学院生
深尾　葉子	大阪大学大学院経済学研究科准教授
本條　晴一郎	東京大学東洋文化研究所リサーチフェロー
横山　和成	独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業総合研究センター生産支援システム研究チーム主任研究員
與那覇　潤	愛知県立大学文学部准教授
後井　隆伸	大阪大学大学院国際公共政策研究科修士課程
生田　美智子	大阪大学大学院言語文化研究科教授
池条　佐衣子	看護士
石田　慎介	大阪大学大学院言語文化研究科修士課程
内田　　力	東京大学大学院総合文化研究科修士課程
大平　泰男	有限会社フルーションプログレス代表取締役
片倉　もとこ	国際日本文化研究センター名誉教授
葛城　政明	大阪大学大学院経済学研究科准教授
兼橋　正人	東京大学大学院学際情報学府博士課程
サカキマンゴー	親指ピアニスト
永井　リサ	九州大学大学院比較社会文化学府研究生
長崎　暢子	龍谷大学アフラシア平和構築研究センターフェロー
中村　尚司	龍谷大学リサーチフェロー
馬場　紀寿	東京大学東洋文化研究所助教
星　　泉	東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所准教授
脇田　晴子	城西国際大学大学院人文科学研究科客員教授
和田　貴美子	株式会社ＰＥＯＮＹアートディレクター

話題提供者リスト：　6 名

氏　　名	職　　名　　等
内田　　力	東京大学大学院総合文化研究科大学院生
海部　岳裕	大阪大学大学院言語文化研究科博士課程
坂本　　毅	有限会社バンベン代表取締役

馬場　紀寿　　東京大学東洋文化研究所助教
宮本　万里　　日本学術振興会特別研究員（京都大学人文科学研究所）
村田　真一　　日本放送協会スペシャル番組センターチーフ・プロデューサー

研究会開催実績：
第１回：　2008 年 6 月 19 日～20 日　（於：高等研・大阪大学）
第２回：　2009 年 1 月 8 日～9 日　（於：高等研）
第３回：　2009 年 2 月 23 日～24 日　（於：吹田市内）

研究実績の概要：
多様な参加者を集め、「コンポジウム（コンサート＋シンポジウム）」という斬新な形式の研究会を開催することで、三度の研究会とも、きわめて活発な討論を展開することができた。その中から得られた最大の成果は、自分自身を観察対象と切り離すことは、客観性を保証するどころか、逆にそれを阻害する、という発見である。人間の心は、自分自身で意識していることと、意識していないこと（無意識）から構成されており、後者の影響力が極めて強力であることは、既知の事実である。一方、意識を観察対象に集中することは、無意識の作動が観察対象から外れることを意味する。客観性を確保するためには、自分自身の衝動に対する客観的観察が不可欠である。自分の無意識の捉われへの気づきこそが、客観性を保証する以上、それは、対象との切断ではなく、対象との対話的フィードバックループの形成によってのみ実現されることになる。これが創発を導き出す最善の方法ではないかと考えられる。科学的研究のみならず、教育、経営、環境問題への対処、政治などの全ての局面におけるわれわれの行動を、この観点から洗いなおすことで、突破口が開かれるものと期待する。

Achievement:
Inviting a variety of people, as well as introducing the new method of “Conposium (Concert + Symposium), we succeeded to have three times of active academic meetings. The most important result produced through a series of dense discussions was the finding that “objectivity” cannot be realized by detachment between the object and the self. It is well known that the human being cannot be perfectly conscious but always run by unconsciousness. The more we concentrate on the object, the more we loose our observation on our unconsciousness. In order to keep objectivity, we must very sensitive to our unconsciousness. It is not realized by the detachment between the object and the self, but making a dialectic feedback cycle between them. We believe this is the best way to activate the process of emergence or tacit knowing. We expect we can open a break through by adapting this way of thinking not only on science but also on education, management, environment activity, politics, etc.

担当：　金森所長